

海潮音

上田敏



海潮音



上田
敏

ほるぷ出版

市古貞次・小田切進・編 日本の文学 9

海潮音

著(訳)者 上田 敏

責任編集 市古貞次(古典編)

小田切進(近代編)

発行日 昭和六十年二月一日 初版第一刷発行
発行所 株式会社 ほるぷ出版

代表 中森詩人

東京都新宿区新宿二一十九一十三

電話(〇三)三五四一七〇三二(代)

総発売元 株式会社 ほるぷ

東京都新宿区新宿二一十九一十三

電話(〇三)三五六一六二二一(代)

製作 東京連合印刷株式会社

印刷 図書印刷株式会社

函・表紙印刷 共同印刷株式会社

目次

海潮音

注

『海潮音』にみる伝統的音楽美

篠田一士

187 176

海
潮
音

遙^{はるか}に此書^{このしよ}を満洲^{*}なる森鷗外氏に献ず

大寺の香の烟けむりはほそくとも、空にのぼりて
あまぐもとなる、あまぐもとなる。

獅^{*}し

子^レ

舞^{まい}

歌^{うた}

序

巻中収むる所の詩五十七章、詩家二十九人、伊^イ太^タ利^リ亜^アに三人、英^イ吉^ギ利^{リス}に四人、独^ド逸^{イッ}に七人、プ^プロ^ロヴ^ヴンスに一人、而^シして仏^フ蘭^ラ西^スには十四人の多きに達し、曩^{サキ}の高踏派と今の象徴派とに属する者其^{その}大部を占む。

高踏派の壮麗体を訳すに当りて、多く所謂^{いわゆる}七五調を基としたる詩形を用ゐ、象徴派の幽婉^{ゆうえん}体を翻^{はん}するに多少の変格を敢^{あえ}てしたるは、其^{その}各^{おの}の原調に適合せしめむが為^{ため}なり。

詩に象徴を用ゐること、必らずしも近代の創意に非^あらず、これ或^{ある}は山嶽と共に旧^{ふる}るきものならむ。然^{しか}れども之を作詩の中心とし本義として故^{こと}

らに標榜する所あるは、蓋し二十年来の仏蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の仏詩は高踏派の名篇に於て発展の極に達し、彫心鏤骨の技巧実に燦爛の美を恣にす、今茲に一転機を生ぜずむばあらざるなり。マラルメ、エルレエヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を説けり。訳者は今の日本詩壇に對て、専ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、訳者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオパネルの詩に注げり。然れども又徒らに晦澁と奇怪と以て象徴派を攻むる者に同ぜず。幽婉奇聳の新聲、今人胸奥の絃に觸るゝにあらずや。坦々たる古道の尽くるあたり、荆棘路を塞ぎたる原野に對て、之が開拓を勤むる勇猛の徒を貶す者は怯に非らずむば情なり。

訳者嘗て十年の昔、白耳義文学を紹介し、稍後れて、仏蘭西詩壇の新聲、特にエルレエヌ、エルハアレン、ロオデンバッハ、マラルメの事を

説きし時、如上文人の作なほ未だ西欧の評壇に於ても今日の声誉を博する事能はざりしが、爾來世運の転移と共に清新の詩文を解する者、漸く数を増し勢を加へ、マアテルリンクの如きは、全欧思想界の一方に覇を称するに至れり。人心觀想の默移實に驚くべき哉。近体新声の耳目に媚はざるを以て、倉皇視聽を掩はむとする人々よ、詩天の星の宿は徒りぬ、心せよ。

日本詩壇に於ける象徴詩の伝來、日なほ浅く、作未だ多からざるに當て、既に早く評壇の一隅に囁々の語を為す者ありと聞く。象徴派の詩人を目して徒らに神經の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ、卿等の神經こそ寧ろ過敏の徵候を呈したらずや。未だ新声の美を味ひ功を収めざるに先ちて、早く其弊竇に戰慄するものは誰ぞ。

欧州の評壇亦今に保守の論を唱ふる者無きにあらず。仏蘭西のブリュンチエル等の如きこれなり。訳者は芸術に對する態度と趣味とに於て、

此偏想家と頗る説を異にしたれば、其云ふ所に一々首肯する能はざれど、
仏蘭西詩壇一部の極端派を制馭する消極の評論としては、稍耳を傾く可
きもの無しとせざるなり。而してヤスナヤ・ポリヤナの老伯が近代文明
呪詛の声として、其一端をかの「芸術論」に露はしたるに至りては、全
く賛同の意を呈する能はざるなり。トルストイ伯の人格は訳者の欽仰措
かざる者なりと雖、其人生觀に就ては、根本に於て既に訳者と見を異に
す。抑も伯が芸術論はかの世界觀の一片に過ぎず。近代新聲の評隲に就
て、非常なる見解の相違ある素より怪む可きにあらず。*日本の評家等が
僅に「芸術論」の一部を抽読して、象徴派の貶斥に一大声援を得たる如
き心地あるは、毫も清新体の詩人に打撃を与ふる能はざるのみか、却て
老伯の議論を誤解したる者なりと謂ふ可し。人生觀の根本問題に於て、
伯と説を異にしたがら、其論理上必須の結果たる芸術觀のみに就て賛意
を表さむと試むるも難い哉。

象徴の用は、之が助を藉りて詩人の観想に類似したる一の心状を讀者に与ふるに在りて、必らずしも同一の概念を伝へむと勉むるにあらず。

されば靜に象徴詩を味ふ者は、自己の感興に應じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道断の妙趣を翫賞し得可し。故に一篇の詩に對する解釈は人各或は見を異にすべく、要は只類似の心状を喚起するに在りとす。

例へば本書一一六頁「鷺の歌」を誦するに當て讀者は種々の解釈を試むべき自由を有す。此詩を広く人生に擬して解せむか、曰く、凡俗の大衆

は眼低し。法利賽の徒と共に虚偽の生を営みて、醜辱汚穢の沼に網うつ、

名や財や、はた榮欲を漁らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白鷺は羽風

徐に羽撃きて、久方の天に飛び、影は落ちて、骨蓬の白く清らにも漂

ふ水の面に映りぬ。之を捉へむとしてえせず、此世のものならざればな

りと。されどこれ只一の解釈たるに過ぎず、或は意を狭くして詩に一身

の運を寄するも可ならむ。肉体の欲に鑿きて、とこしへに精神の愛に飢

ゑたる放縱生活の悲愁こゝに湛へられ、或は空想の泡沫に帰するを哀みて、真理の捉へ難きに憧がるゝ哲人の愁思もほのめかさる。而して、此詩の喚起する心状に至りては皆相似たり。一四五頁「花冠」は詩人が黄昏の途上に佇みて、「活動」、「樂欲」、「驕慢」の邦に漂遊して、今や帰り来れる幾多の「想」と相語るに擬したり。彼等默然として頭俛れ、齎らす所只幻惑の悲音のみ。孤り、此等の姉妹と道を異にしたるか、終に帰り来らざる「理想」は法苑林の樹間に「愛」と相睦み語らふならむといふに在りて、冷艶素香の美、今の仏詩壇に冠たる詩なり。

訳述の法に就ては訳者自ら語るを好まず。只訳詩の覚悟に関して、ロセッティが伊太利古詩翻譯の序に述べたると同一の見を持したりと告白す。異邦の詩文の美を移植せむとする者は、既に成語に富みたる自國詩文の技巧の爲め、清新の趣味を犠牲にする事あるべからず。而も彼所謂逐語訳は必らずしも忠実訳にあらず。されば「東行西行雲渺々。二月

三月日遅々^{ちち}」を「とざまにゆき、かうざまに、くもはるばる。きさらぎ、やよひ、ひうらうら」と訓み給ひけむ神託もさることながら、大江朝綱^{*おおえのあさつな}が二条の家に物張の尼が「月によつて長安百尺の楼に上る^{のぼ}」と詠じたる例に従ひたる所多し。

明治三十八年初秋

上 田 敏

燕の歌

弥生^{やよい}ついたち、はつ燕^{つばめ}、

海^{うみ}のあなたの静けき国の
便^{たより}もてきぬ、うれしき文^{ふみ}を。

春のはつ花、にほひを尋^とむる

あゝ、よろこびのつばくらめ。

黒と白との染分^{そめわけ}綺^{しま}は

春の心の舞^{まい}姿^{すがた}。

弥生^き来^きにけり、如月^{きさらぎ}は